

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 5-7

読書（その2）

目次

要 約	2
はじめに	4
1. 子どもの本の誕生	5
●子どもの本の誕生前史	5
●子ども親の転換と子ども期の誕生	6
●子どもの本の誕生	6
●日本の子どもと童話	7
●大正期の児童の読書傾向	7
2. 子どもの読書環境	9
●読書行動の成立条件	9
●子どもの所有する本	14
3. 子どもの読書内容	17
●読んだことのある本	17
●一番おもしろかった本	20
4. 読書への意欲	25
●読書意欲	25
●読書能力への自信	28
5. 読書サークルの子どもたち	31
シリーズ/講座・子ども調査入門 ⑨ 親の見方・子どもの見方	深谷昌志 35
資料1 調査票見本	42
資料2 学年・性別集計表	49

調査レポート／読書(その2)

要約

児童文学者 西本鶏介
放送大学教授 深谷昌志
筑波大学研究生 庄健二

① 読書行動の成立条件

学校の図書館(図書室)へのアクセシビリティ(近づきやすさ)は、学年の上昇とともに減少するが、56%の子どもたちは本を読むのが好きとこたえている。

- P.10 図1 読書に関わる環境
- P.13 表1 学校図書館に行く回数
- P.13 表2 学校図書館で本を借りる回数

② 子どもの所有する本

所有する本の数が多様性にとんでいるのは、両親、とくに母親の態度の影響がみられる。

- P.14 図2 子どもの所有する本
- P.16 表6 本の所有の理由

③ 読んだことのある本

意外と古典的名作が読まれてはいるし、男子よりも女子が、4年生よりは6年生が読破する割合が高くなっている。

- P.18 表7 読んだことのある本
- P.19 図3 読んだことのある本(性別)
- P.20 図4 読んだことのある本(学年別)

● 子供の所有する本



調査概要

- | | | | |
|----------|---|---------|--|
| 1. 調査主題 | 子どもの読書行動をとらえる | 3. 調査項目 | 所有する本の種類と冊数/本の知名度、読書度/読書の動機/読書体験度/本屋、図書館の利用度など |
| 2. 調査の視点 | 子どもの読書行動を成立させる条件を出して、テレビ時代の中での読書の姿を明らかにする | 4. 調査時期 | 昭和60年5月 |

④ 一番おもしろかった本

きわめて分散しており、おもしろそうだと自分で思ったからなどの個人的な理由でその本を選んでいる。

P.21 表8 一番おもしろかった本

P.24 表9 本を読んだ理由

⑤ 読書意欲

お気に入りの本を何度も読み返したり、両親に本をねだるなどはしたことがあるものの、他の読書の経験と意欲に乏しい。

P.26 表10 読書行動の種類

⑥ 読書能力への自信

読書の好きな子どもは、自分自身の読書能力の自己評価だけでなく、国語や作文の力に対しても自信をもっている。

P.30 表13 読書能力の自己評価×読書が好きか

P.30 表14 国語・作文が得意×読書が好きか

⑦ 読書サークルの子どもたち

読書サークルに入っている子どもたちも、読書の好きな子どもたちと同様に、自分自身の読書能力の自己評価や国語・作文の力に対しても自信をもっている。

P.33 図8 読書能力の自己評価×サークルへの入会

P.34 図9 読書生活×サークルへの入会



5. 調査対象 奈良近郊の小学4～6年生(726人)

東京近郊の小学4～6年生(37人)

6. 調査方法 726人は学校通しによる質問紙調査、37人については読書サークルを通じた質問紙調査

7. サンプル数

(人)

学年/性	男子	女子	計
4年	89	86	175
5年	140	129	269
6年	143	139	282
計	372	354	726

(他に37)

はじめに



子どもが本を読むという行動を、ここでは読書行動としてとらえてみたい。この読書行動を成立させるための環境条件としては主に3つの要因が考えられよう。

ひとつには、本ないし活字メディアへのアクセシビリティ（「接近」の意味だが、ここでは「近づきやすさ」の意味で用いる）、すなわち読書への接近可能性や入手の可能性の問題があげられる。具体的に言うならば、本を手に入れることができる施設、設備、図書館や本屋の存在などを意味する。

ふたつめには、読書のために使う時間があることであろう。テレビ視聴や勉強のための時間に生活時間の多くがとられると必然的に時間の余裕がなくなり、読書行動が妨げられることに通じる。

最後の、そして最大の条件としては、子ども自身の読書への意欲があげられよう。意欲が高ければ、図書館や本屋が遠くにあったとしても出かけていくであろうし、テレビを我慢してでも本を読むようになるであろう。そうした意味で読書行動は子ども自身の意欲に支えられるが、それが客観的な尺度としては時間の長さとなり、そしてその長さに影響するのがアクセシビリティとなる。そこで以上のような条件をさぐっていくのが本稿の目的である。

謝 辞

調査票の作製及びサークル通しの調査の実施にあたっては、児童文学者の西本鶏介先生にたいへんお世話になりました。お礼を申し上げます。

1. 子どもの本の誕生



子どもの本の誕生前史

1450年ごろにグーテンベルグが活版印刷術を発明する以前から、トロイア戦争やアーサー王の伝説、イソップ物語、ロビン・フッドなどの物語は、手書きの本として存在はしていたと言われる。しかし、印刷術が導入されるまでは、本というのはめったに見ることのできない貴重品であり、子どものための本などはどうも考えられないものであったとJ・R・タウンゼントは述べている(「子どもの本の歴史」上 岩波書店)。

また、文字化されることはなかったが、民話や民間伝承もあり、乳母や母親からお話をしてもらっているところは日本でも同じであった。フィリップ・アリエスはその著作「子どもの誕生」のなかで、幼年時代のルイ13世

が物語やおとぎ話を話してもらったことを記述している(1605年ごろ)。

とくに子ども向けというわけではないが、1474年にはウィリアム・キャクストンが「トロイア物語のなかから」という本を出版しており、以降に出版された本を子どもが読むようになったとヒュー・ローズは述べている。

このように、15世紀以降、行商人たちの手でイギリス各地に印刷された本が広められていったにせよ、子どものために印刷された本はコメニウスのラテン語の教科書(1658年)ぐらいのもので、子どもに読みやすい物語の本は、1697年のシャルル・ペローの童話を待たねばならなかった。

子ども観の転換と子ども期の誕生

ジョン・ロックはその著書「教育に関する考察」（1693年）のなかで、生まれたばかりの子どもは白紙のようなもので、教育によってそのページが埋められていくのだとした。

また、ジャン・ジャック・ルソーはその著書「エミール」（1762年）のなかで、子ども（人間）は性善なるものであるから、悪が入りこむのを防がなければならないとしている。

ともあれ、18世紀の初めごろまでには、原罪を背負った子どもという考え方から、子どもは無垢の状態で生まれてくるという考え方に大きな転換をとげたのだと言うことができ

よう。

したがって、アリエスによれば、「子ども期」の概念とは、純情無垢で無力な子どもたちを救うための両親への依存・悪からの保護、隔離・社会的責任の猶子によって構成されていると言えよう。

こうした白紙の状態である子どもたちがおとなや社会の悪に染まらないようにするために、子ども期の概念とその概念を実行に移すための手段・方法・装置が必要になってくる。学校もそのひとつであるし、実を言うと子どものための本もそうした教化策のひとつに位置づいてくる。

子どもの本の誕生

前述したロックは、文字を覚えて読むことができるようになった子どもには、やさしくて楽しくて、しかもためになるような本を与えてやらねばならないとした。

またルソーは、もともと子ども向けに書かれた本ではない「ロビンソン・クルーソー」（1719年）をエミール（すなわち子ども）の本とするのに力を貸したのである。

さかのぼって、シャルル・ペローは1697年に「教訓を含んだすぎし昔の物語——または小話集」、いわゆるペローの童話を出版したが、子どもに独自の世界を認めて民話を出版した最初の作家であるとされている（ベッティーナ・ヒューリーマン「子どもの本の世界」福音館書店）。

1697年当時は子どものために本を出版しようとする人は皆無であったが、この童話は子どもたちの心をあっという間にとらえてしまった。

1726年には、これも子ども向けの本ではないが、スウィフトの「ガリバー旅行記」が出版された。また1744年にはジョン・ニューベリーが「かわいいポケット・ブック」を出版し、翌年には世界初の子どものための本屋をひらき、その後彼はその本屋を22年間経営することになる。子どものための本屋が22年間も続いたということは、子どもの本の出版・販売が、すでに商売として成り立っていたことを示している。

そして19世紀にはいると、グリム兄弟の「子どもと家庭のための民話集」（1812年）やアンデルセンの「童話集」（1835年）、キャロルの「ふしぎの国のアリス」（1865年）、オルコットの「若草物語」（1868年）、ヴェルヌの「海底二万里」（1870年）、トウェインの「トム・ソーヤの冒険」（1876年）、コルローディの「ピノッキオの冒険」（1883年）、スティーンソンの「宝島」（1883年）、ファールブルの「昆

虫記」(1879-1907年)、シートンの「動物記」(1898年)など列挙するのにとまがないほ

ど多数の子ども向けの本が出版されるようになってくる。

日本の子どもと童話

日本の場合、イソップやグリム、そしてアンデルセンなどの名作童話はいち早く訳出されてはいるが、それらは都市のごく富裕層の家庭に浸透したにとどまっていた。したがって、親から子へと口うつしのかたちで伝達された民話を別にすれば、——実を言うと、童話の基本は民話にあるとも言えるのだが——西欧の香りのする近代童話が子どもの世界へ入り始めたのは、それほど昔の話ではない。日本ではじめて子ども向けの雑誌が刊行されたのは、明治11年に刊行された「顕才新誌」と言われるが、マス・メディアという感じの子ども雑誌が登場したのは、創刊号から12,000部を印刷した「少年園」(明治21年)や「日本之少年」(明治22年、博文館)、「こども」(明治22年、東京教育社)以降となる。その後、明治24年には、大手出版社の博文館から「少年文学叢書」が出版されている。日本の児童文学史上の1ページをかざった巖谷小波の「こがね丸」は、その中の1冊である。ちなみに、女の子の間に人気のある「小公女」が若松賤子の訳で「女学雑誌」に連載され始めたのは明治23年、「乞食王子」が文武堂から出版されたのは、明治30年であった。

しかし、この時期でも、子ども向けの雑誌や本に接した子どもは、富裕な知識人層の家庭に限られ、子ども雑誌が、子どもの世界に浸

透していったのは、明治40年代へ入ってからであった。明治38年に実業之日本社から「幼年の友」や「日本少年」、翌39年に、博文館から「幼年画報」や「少女世界」が刊行されたのがその一例だが、明治44年には、「立川文庫」の出版も始まっている。周知のとおり、「立川文庫」は1冊3銭で新しい本を読める一種の貸本制をとり入れ、「岩見重太郎」や「水戸黄門」「宮本武蔵」などを、いわば、子ども向けの講談本の形で刊行していった。そして、それまでの雑誌が、どちらかという都市を中心に流布していったのと比べ、農村の子どもたちにも親しまれたという意味で、「立川文庫」が子どもに影響を与えたものは大きい。

なお、芥川龍之介の「杜子春」や豊島与志雄の「天下一の馬」、宇野浩二の「露の下の神様」など、現在では名作とよばれる童話や北原白秋の「ベチカ」や「この道」などの詩を掲載した鈴木三重吉の「赤い鳥」が創刊されたのは、大正7年であった。そのほか「子供之友」(婦人之友社、大正3年)、「コドモノクニ」(東京社、大正11年)、「幼年倶楽部」(講談社、大正15年)のように、大正時代に入ると、それぞれのレベルで、子どもたちの人間形成に影響を与えたと思われる雑誌の刊行が続いている。

大正期の児童の読書傾向

そうした時期の読書傾向を資料面でおさえてみると、大正5年、大阪府下の九条小学校の「課外読物」調査によると、子どもたちが

ら読まれているのは、「日本少年」(100名)、「少年世界」(60名)、「少年」(36名)など(「児童研究」大正5年3月)と言われる

し、また、岡山師範附属小の調査(大正5年)では、524名のうち「日本少年」(57名)、「少女の友」(38名)、「幼年の友」(22名)、「少年世界」(19名)など(「児童研究」大正5年4月)のとおりである。

さらに、大正6年、東京府下の小学校5～6年生を対象に調査を実施した権田保之助は、男子＝「日本少年」(52%)、「少年世界」(22%)、「少年」(18%)

女子＝「少女の友」(51%)、「少女画報」(27%)、「少女世界」(23%)

(権田保之助『民衆娯楽問題』大正10年)のような結果を提出している。そうした意味では、大正時代は、さまざまな子ども雑誌が刊行され、順調に売れ行きを伸ばした、子ども雑誌の黄金時代であった。

このように、いろいろな子ども雑誌が店頭には並んでいるので、子どもたちはいくつかの雑誌を読み比べながら成長するかたちとなる。

例えば、明治42年、東京の下谷生まれの村上信彦は、「立川文庫」の回し読みからスタートしたが、「立川文庫などは一年かそこらで卒業」し、その後「ポケット少年」や「譚海」、「少年」と、雑誌を遍歴した後、

「家では雑誌を一種だけ〈官費〉で買って

くれたので、私は『少年倶楽部』を選んだ。本誌20銭に3銭の附録がついて23銭である。……私は『少年倶楽部』の出る日を覚えていて、その日にはかならず出かけていった。まだ来ていないと言われ、日に2回出直したことがある。買い求めるともう家に帰るまで待ちきれないで、歩きながら読んだ」という。しかし、「附録つきで何か得のような気がして選んだ『少年倶楽部』が、通俗的で、娯楽一点ばりなのに飽き足らなくなり、「日本少年」の定期購読を始めている。そして、「日本少年」について、

「表紙は艶のある印刷で美しかった。また、毎号の口絵が楽しかった。それぞれ相当の画家に描かせたものだが、素描あり水彩あり油絵ありで、暮れかかる山村の風景や、寂しい丘にたたく少年の姿や、一つ一つが印象に残った」と回顧している(村上信彦『大正、根岸の空』)。

しかし、テレビやマンガの普及につれて、読書がこれまでのような子どもの余暇の中での主役としての座から下りているのではないだろうか。

そうしたテレビ時代の中での読書の姿を、以下に紹介していくことにしたい。

2. 子どもの読書環境



子どもたちはさまざまなメディア、とくに映像メディアや活字メディアの中で暮らしているのが現在の状況であろう。以下、子ども

をとりまく状況のうち、活字メディアに関連のある状況からみていくことにしたい。

読書行動の成立条件

出版年鑑によれば、1983年度には児童図書だけでも2,222点が発行されている。しかも毎年2,000点近くが発行され続けているので、児童向けの図書に限っても、きわめて多数の本が子どもたちの身のまわりにあふれている計算になる。

それでは、子どもたちの、活字メディアへのアクセシビリティ、すなわち入手の可能性ないしは接近の可能性が高まっている、と言ってもよいのだろうか。

活字メディアへのアクセシビリティのルートを考えてみるならば、子どもの場合、まず、学校の図書館、あるいは図書室の利用が

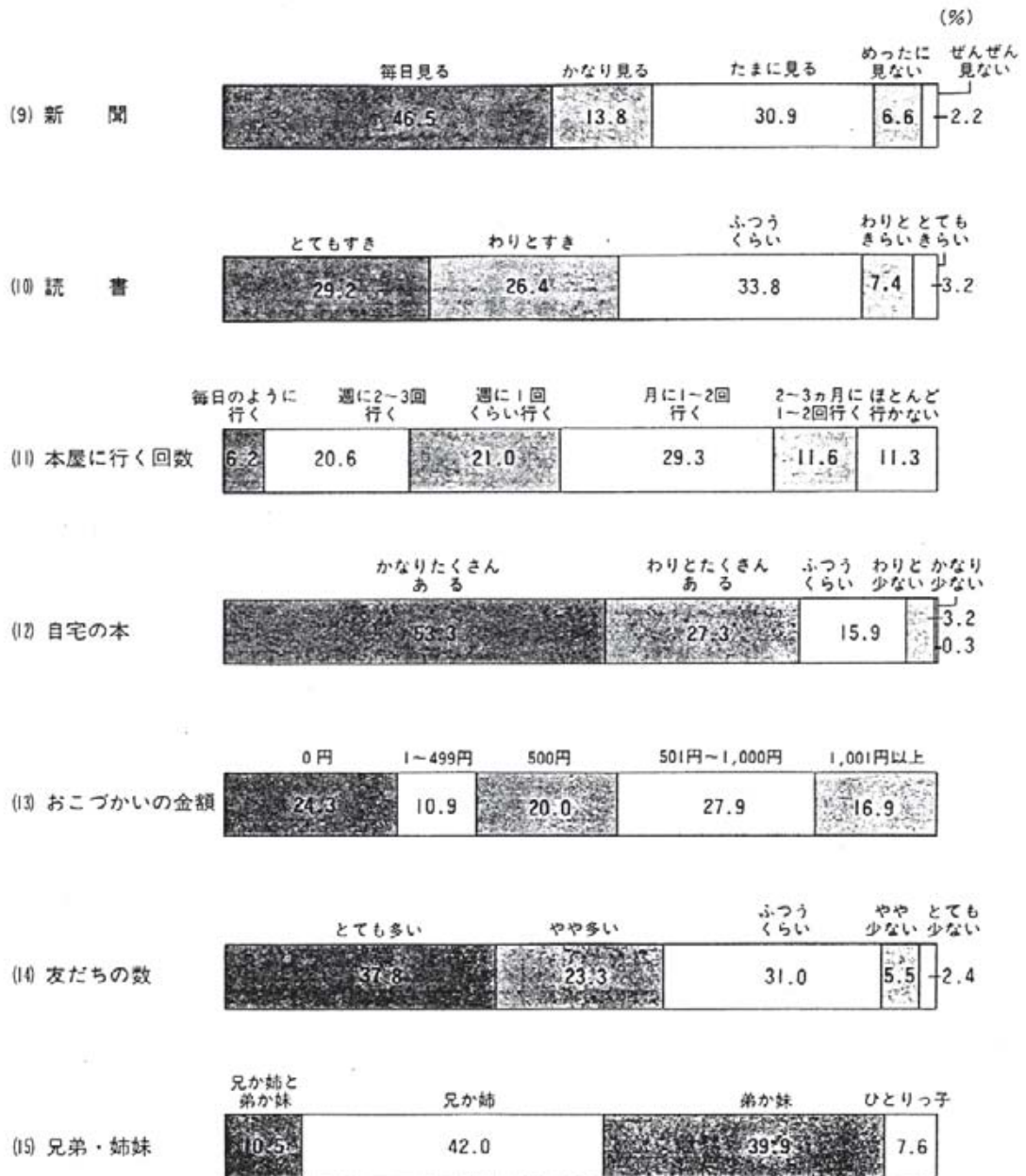
考えられる。

そこで図1をみていただきたい。この図1は、読書に関係するさまざまな日常生活のなかの要素について、子どもたちにこたえてもらったものである。

(1)は学校の図書館(図書室)に行く回数についてたずねたものであるが、毎日のように行くのはわずか3%の子どもでしかなく、たいていの子どもたちは、週に2~3回か1回ぐらいしか行かないし、なかにはほとんど行かない子どもも16%みられる。これを学年別にみたものが表1で、週に2~3回行っていた子どもたちが、4年37%、5年29%、6

図1・読書に関わる環境

	毎日のように行く	週に2~3回行く	週に1回くらい行く	月に1~2回行く	2~3か月に1~2回行く	ほとんど行かない
(1) 学校図書館に行く回数	3.2	27.7	33.1	13.5	6.2	16.3
(2) 学校図書館で借りる回数	0.7	17.8	27.4	11.3	5.9	35.9
(3) 県・市などの図書館	たびたび行ったことがある	かなり行ったことがある	たまに行ったことがある	めったに行かない	ぜんぜん行ったことがない	
	16.3	13.0	32.9	19.4	18.4	
(4) まんが	とてもすき	わりとすき	ふつうくらい	わりとさらい	とてもさらい	
	59.1	19.8	14.3	4.7	2.1	
(5) テレビ視聴時間	1時間未満	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間くらい	5時間以上
	10.4	17.9	28.3	23.3	11.7	8.4
(6) 国語	とてもとくい	わりととくい	ふつうくらい	すこしにがて	とてもにがて	
	9.8	20.2	35.2	24.4	10.4	
(7) 作文	とてもとくい	わりととくい	ふつうくらい	すこしにがて	とてもにがて	
	5.8	12.6	28.7	29.2	23.7	
(8) 日記	毎日つけている	たまにつけている	めったにつけない	つけたことがない		
	5.3	31.3	51.1	12.3		



年21%と減少していき、かわって月に1~2回が、4年6%、5年15%、6年16%。ほとんど行かない子どもたちも、4年12%、5年16%、6年19%と増加していく。

このことは何を意味しているのだろうか。もちろん、子どもたちが、いわゆる受験体制の中に組み込まれていき、のんびりと図書館(図書室)で過ごす余裕がなくなってきたもととれるし、逆に、受験体制に背を向けた子どもたちが、読書イコール国語イコール勉強イコール苦手という意識から、国語などの勉強の象徴とも言える図書館(図書室)を避けるようになってしまうのかもしれない。

さらに、国語などの時間に強制的に図書館(図書室)に連れて行かれる可能性もあるので、本人の意志によって左右されやすいと思われる本の貸し出しについてたずねたものが、同じ図1の(2)である。

この(2)も(1)と同じように、学校の図書館(図書室)で本を借りる回数についてたずねたものだが、この(2)では、もっと明確にあらわれている。ほとんど本を借りない子どもたちが36%にものぼり、しかも、表2によれば、週に2~3回は本を借りていた子どもたちが、4年31%、5年24%、6年4%と激減し、かわりに、ほとんど借りないという子どもたちが、4年17%、5年28%、6年55%と激増している。

それでは、子どもたちは活字離れをしているのだろうか。たとえば、学校以外の図書館や本屋についてはどうなっているのであろうか。

図1の(3)は、県や市などの図書館に行ったことがあるかどうかという経験をたずねたものである。この図によれば、学校の図書館(図書室)とはカテゴリーが異なっているので単純に比較はできないにせよ、たびたび行ったことがある子どもたちは16%にのぼっている。県や市などの図書館は、とくに子どもに対し

てアクセシビリティに欠けることが多いが、それにしてはかなりよく行っているとみるべきなのだろう。

しかしながら、やはり学年別にみみると、表3のように、たびたび行く子どもたちは、学校の図書館に行く回数と同様、減少傾向にあることは否めない。

それでは、子どもたちは活字離れをしてしまっているのだろうか。

同じ図1の(4)から(10)は、まんがや新聞など子どもをとりまく活字メディアを含めた状況をたずねたものである。

まず、(4)のまんがについては、とても好きな子どもたちが59%を占めてしまっているし、(5)のテレビの視聴時間についても、2時間くらいとこたえた子どもが28%を占めている。これでは読書時間を十分にとるのは無理のようである。

活字に関係のある(6)から(10)に目を移してみると、(6)の国語はふつうぐらいか、むしろやや苦手で、(7)の作文についても少し苦手であり、(8)の日記についても、めったにつけない子どもたちが51%を占めている。

しかしながら、(9)の新聞では、テレビ欄やまんがしか見ないかもしれないにせよ、毎日見る子どもたちが47%にのぼっており、(10)の読書の好き嫌いについても、とても好き、わりと好きの割合を合わせれば56%の子どもたちが、好きだとこたえているのである。

さらに、(11)の本屋に行く回数をみてもさほど少ないとも言えず、表4によれば、学年が上がるにつれて頻度がやや増加する傾向にある。しかも(12)によれば、「自宅に本がかなりたくさんある」と5割強の子どもたちがこたえており、思ったよりも子どもたちは、活字離れしていない印象を受けるのである。

ただ、本は自分で手に入れて読むものという意識も考えられるので、つぎに、自分の所有する本についてみていきたいと思う。

表1・学校図書館に行く回数

(%)

学年	尺度	毎日行く	週に2~3回	週に1回	月に1~2回	2~3ヵ月に1~2回	ほとんど行かない
4年		3.5	36.6	(37.8)	6.4	4.1	11.6
5年		2.7	28.9	(32.3)	15.2	4.6	16.3
6年		3.6	20.9	(31.2)	16.2	9.0	19.1

○=最大値

表2・学校図書館で本を借りる回数

(%)

学年	尺度	毎日	週に2~3回	週に1回	月に1~2回	2~3ヵ月に1~2回	ほとんど借りない
4年		4.0	30.6	(36.0)	6.9	5.2	17.3
5年		1.9	23.7	27.4	12.6	6.9	(27.5)
6年		0	4.3	22.1	12.9	5.4	(55.3)

○=最大値

表3・県や市などの図書館へ行ったこと

(%)

学年	尺度	たびたび行く	かなり行く	たまに行く	めったに行かない	ぜんぜん行かない
4年		24.9	13.9	(26.5)	18.5	16.2
5年		12.8	14.3	(32.2)	19.2	21.5
6年		14.3	11.1	(37.7)	20.1	16.8

○=最大値

表4・本屋に行く回数

(%)

学年	尺度	毎日行く	週に2~3回	週に1回	月に1~2回	2~3ヵ月に1~2回	ほとんど行かない
4年		3.0	16.1	19.6	(32.1)	11.3	17.9
5年		5.4	19.2	19.2	(29.8)	15.3	11.1
6年		9.0	24.7	23.7	(26.9)	8.2	7.5

○=最大値

子どもの所有する本

子どもたちの身のまわりには活字メディアがあふれている。とは言っても、いざ利用するとなると、自分の持っている本、買ってきた本が、やはり便利である。前の図1の(13)のように、自分のおこづかいで本を買うとなるとけっこうたいへんだが、父親や母親にねだるという手も残されている。

そこで、自分の本を何冊持っているかをたずねたものが図2である。一番上の全体のところの数値に注目すると、さすがに10冊以下の子どもは6%しかなく、100冊以上の子どもも16%にのぼっている。しかも、100冊以上の子どもは、学年の上昇とともに増加する傾向をみせている。

所有する本の内わけをたずねたのが表5であり、まんが、物語・童話、図鑑は15冊以上、参考書・問題集が3～4冊、辞典・辞書は1～2冊といったところが子どもの本箱の平均的

な中身であろう。

なお、表6に示しておいたが、(1)まんがの本にしても、自分で買ったものばかりとは限らず、他の勉強に関わりのある参考書や辞典と同様に、両親が買い与える本がけっこうあるのである。とくに、本稿と関係のある(5)物語や童話は、母親が買い与えていることがわかるのである。

以上のように、思ったよりも活字離れをしていない子どもたち（あるいは、読書に熱心な層とそうでない層に分解してしまった子どもたちとも言えるが）の姿が浮かんでくるが、このような子どもたちはどんな本を読んでいるのだろうかという疑問も生じてくる。古典的な名作が読まれなくなり、軽くて薄くて短い本が読まれるようになってきているのだろうか。子どもたちの読書環境が多様化しているだけに、関心のもたれるところである。

図2・子どもの所有する本

		(%)					
		10冊以下 しかない	11-20冊 ある	21-30冊 ある	31-50冊 ある	51-99冊 ある	100冊以上 ある
全	体	5.5	16.4	18.2	22.5	21.2	16.2
4	年	5.7	12.1	15.5	28.2	25.3	13.2
5	年	6.0	20.7	18.4	18.0	20.7	16.2
6	年	5.0	14.9	19.6	23.2	19.2	18.1

表5・子どもの所有する本

(%)

項目	尺度						
	15歳以上	11~14歳	7~10歳	5~6歳	3~4歳	1~2歳	1歳もない
1. まんが	45.6	9.5	11.3	9.5	9.2	9.5	5.4
2. 物語・童話	42.6	8.5	13.4	14.5	11.2	7.0	2.8
3. 図鑑	36.6	11.3	13.6	10.1	11.5	12.1	4.8
4. 参考書・問題集	16.4	5.6	14.2	16.7	22.2	17.6	7.3
5. 辞典・辞書	8.4	2.3	7.1	14.9	27.9	35.3	4.1

○ = 最大値

表6・本の所有の理由

(%)

項目	尺 度						
	1さつも ない	1-2さつ ある	3-4さつ ある	5-6さつ ある	7-10さつ ある	11-14さつ ある	15さつ以上 ある
(1) まんがの本	5.4	9.5	9.2	9.5	11.3	9.5	45.6
ア. そのうち、自分のおこづか いで買った本の数は	24.0	16.8	14.1	12.3	10.7	7.0	15.1
イ. お母さんからお金をもらっ て買った本の数は	23.8	18.9	15.3	9.3	8.8	5.8	18.1
ウ. お父さんなどから、プレゼン トとしてもらった本の数は	44.4	21.3	12.1	8.6	3.9	1.7	8.0
(2) 参考書や問題集	7.3	17.6	22.2	16.7	14.2	5.6	16.4
ア. そのうち、自分のおこづか いで買った本の数は	75.7	14.2	5.3	3.0	0.6	0.6	0.6
イ. お母さんからお金をもらっ て買った本の数は	24.2	22.7	18.1	13.3	7.4	4.9	9.4
ウ. お父さんなどから、プレゼン トとしてもらった本の数は	58.6	19.3	8.7	4.9	2.3	1.1	5.1
(3) 図 鑑	4.8	12.1	11.5	10.1	13.6	11.3	36.6
ア. そのうち、自分のおこづか いで買った本の数は	85.3	8.3	4.1	1.0	0.5	0.2	0.6
イ. お母さんからお金をもらっ て買った本の数は	32.7	17.7	12.3	8.1	7.0	6.0	16.2
ウ. お父さんなどから、プレゼン トとしてもらった本の数は	43.2	19.1	9.5	3.6	5.5	3.5	15.6
(4) 辞典や辞書	4.1	35.3	27.9	14.9	7.1	2.3	8.4
ア. そのうち、自分のおこづか いで買った本の数は	87.4	8.9	2.6	0.5	0.3	0	0.3
イ. お母さんからお金をもらっ て買った本の数は	29.4	37.9	19.8	5.7	2.3	0.9	4.0
ウ. お父さんなどから、プレゼン トとしてもらった本の数は	54.8	27.1	8.9	1.8	2.6	0.8	4.0
(5) 物語や童話の本	2.8	7.0	11.2	14.5	13.4	8.5	42.6
ア. そのうち、自分のおこづか いで買った本の数は	56.5	20.7	9.8	6.0	3.1	1.7	2.2
イ. お母さんからお金をもらっ て買った本の数は	18.9	17.4	16.1	14.1	10.2	5.6	17.6
ウ. お父さんなどから、プレゼン トとしてもらった本の数は	35.7	23.6	11.5	6.4	6.1	3.2	13.5

○ = 最大値

3. 子どもの読書内容



古典的な名作の読まれる時代は過ぎてしまったのだろうか。それとも、ほそほそと読まれているのだろうか。古典の魅力が子どもた

ちに伝えられているかどうか、気にかかるところである。

読んだことのある本

表7は、今までにつぎのような本を読んだことがあるかどうかをたずねたものである。項目としては「ピノキオ」や「シンデレラ」といった古典的な名作、おとなの世界のベストセラー「窓ぎわのトットちゃん」、テレビで放送されて知名度が高まったと思われる「ひげよ、さらば」、「三国志」、あるいは感想文を書くための課題図書に指定された本、映画になった本などを含んでいる。

なお、「読んだことがあるし、その本を持っている」と「その本を持ってはいないが、読んだことはある」の数値をたしたものをカッコにいれて、その大きい順に1から25まで

並べてある。

この表7によれば、意外なことに、「ピノキオ」とか「シンデレラ」のような古典的な名作が上位にきており、名作以外では「窓ぎわのトットちゃん」が48%となっている。

古典的な名作が上位にきていることについては、たとえば「ピノキオ」は発行されたのが1883年であり、「シートン動物記」は1898年、「足ながおじさん」1912年、「長くつ下のピッピ」1944年などとはるか以前である。映画化されたり絵本になったりアニメーション化されたりしているので知名度が高いのは理解できるにしても、これほど高い数値が出

表7・読んだことのある本

(%)

書名	尺 度	読んだことがあるし、その本を持っている	その本を持ってはいないが読んだことはある	読んだことがある計	読んだことはないが、あらずじくらは知っている	そんな本は知らない
1.ピノキオ		42.5	43.6	86.1	11.1	2.8
2.シンデレラ		42.6	43.4	86.0	11.8	2.2
3.アルプスの少女ハイジ		27.9	42.6	70.5	20.7	8.8
4.フランダースの犬		24.5	31.3	55.8	14.4	29.8
5.窓ぎわのトットちゃん		21.6	26.3	47.9	13.9	38.2
6. 家なき子		21.9	25.6	47.5	16.9	35.6
7.シートン動物記		22.7	24.7	47.4	12.8	39.8
8.ひげよ、さらば		7.1	39.4	46.5	31.6	21.9
9.足ながおじさん		18.3	27.1	45.4	21.4	33.2
10.投げろ魔球ノカッパ怪投手		12.2	32.3	44.6	15.9	39.6
11.ジャングルの少年		12.7	31.4	44.1	14.6	41.3
12.龍の子太郎		16.1	27.9	44.0	18.6	37.4
13.オズのまほうつかい		18.1	25.9	44.0	16.1	39.9
14.シャーロック・ホームズの冒険		14.2	28.3	42.5	20.8	36.7
15.三国志		10.3	28.8	39.1	21.5	39.4
16.風の谷のナウシカ		8.5	26.1	34.6	29.3	36.1
17.ロビン・フッドの冒険		10.7	20.3	31.0	15.1	53.9
18.ロミオとジュリエット		7.8	23.0	30.8	25.2	44.0
19.長くつ下のピッピ		8.8	21.1	29.9	9.3	60.8
20.ガラスのうさぎ		7.9	15.7	23.6	12.3	64.1
21.八犬伝		6.6	16.9	23.5	17.2	59.3
22.太陽の子		4.0	12.8	16.8	9.2	74.0
23.北の国から		2.3	10.9	13.2	9.1	77.7
24.ふたりのイーダ		3.6	8.2	11.8	7.6	80.6
25.マキオのひとり旅		2.9	6.4	9.3	5.3	85.4

図3・読んだことのある本(性別)

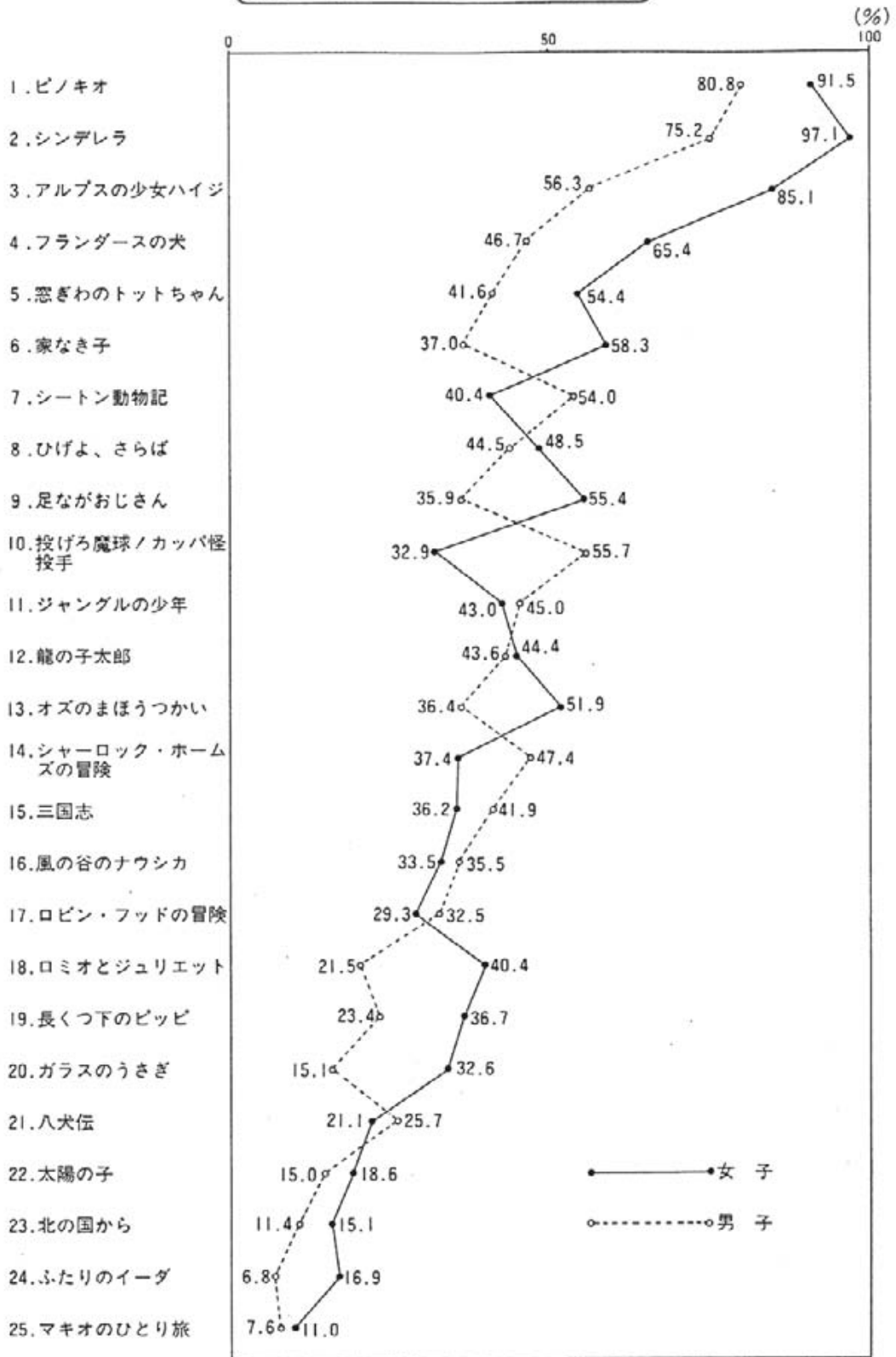
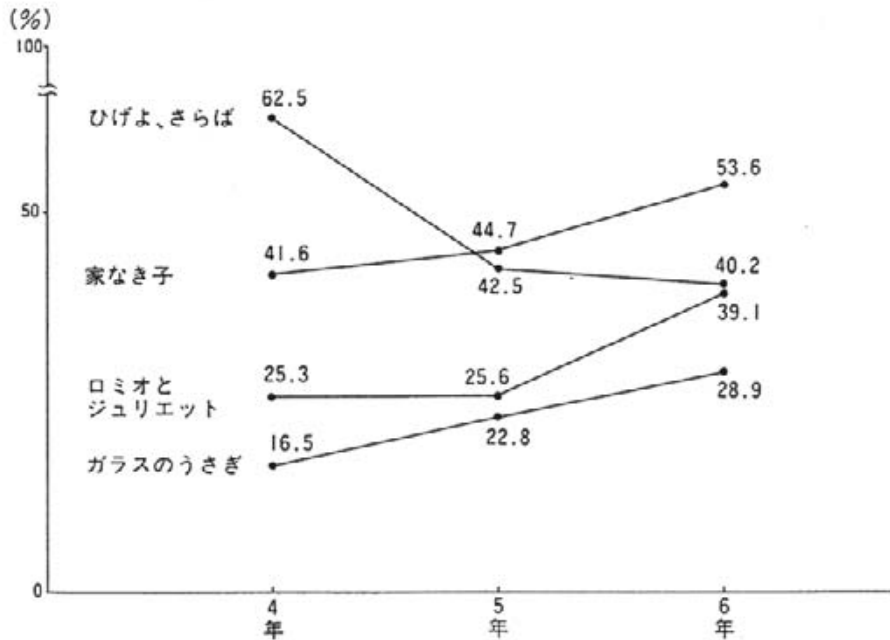


図4・読んだことのある本(学年別)



るとは意外な気がする。

これに対して、人形劇となった「ひげよ、さらば」や「三国志」、アニメーションとなった「風の谷のナウシカ」、ドラマ・映画化された「ガラスのうさぎ」や「太陽の子」などは、意外に読まれていない。

図3は、「読んだことがあるし、その本を持っている」と「その本を持ってはいないが、読んだことはある」の数値をたしたものを男女別にグラフ化したものである。

全体的に女子のほうがよく本を読んでいるが、「シートン動物記」や「シャーロック・ホームズの冒険」などのいわゆる男の子向きの本は、やはり男の子のほうがよく読んでいる。

これを学年別にみたものが図4で、「ひげよ、さらば」のように低学年・中学年向けの本は学年の上昇とともに読まれなくなるものの、他の本については読破率が上昇してくる。

一番おもしろかった本

さてここまでは、いわば調査する側が用意した本についてたずねてきたわけであるが、「今まで読んだ本の中で一番おもしろかった本」の題名を書かせた結果の一部について、述べてみたいと思う。

なお、こちらが用意した1.「ピノキオ」から25.「マキオのひとり旅」を除いた題名の一部

を表8にのせておくことにする。題名のあやふやなもの、ひらがなで書かれたものは見やすくするために除外したり、漢字に直してある。カッコの内の数字は、その本を選んだ人数をあらわしている。

全体にきわめて分散しており、「ズッコケシリーズ」でも全学年で26人が選んだにすぎ

ない。しかもこの「ズッコケシリーズ」というのは*で示してあるように何冊もあるシリーズのものであり、特定のひとつの本としては、「小公女」の9人、「ぼくら3人にせ金づくり」の10人、「15少年漂流記」の7人などときわめて少なくなっている。

おもしろさの点での多様化がすすんでいるとも受けとれるが、その本を選んだ理由をたずねてみると(表9)、「先生にすすめられたから」「お父さんやお母さんにすすめられたから」「友だちがおもしろいといっていたから」などの対人的な影響は比較的少なく、

「テレビでやっていておもしろそうだったから」という映像メディアの影響もたいして大きくはなく、むしろ、「本屋さんで見えてみて、おもしろそうだったから」などという個人的な理由をあげているのである。

読書行動を成立させるためには、子ども自身の時間的余裕と本へのアクセシビリティを保障するというだけではなく、本人の、本を読みたいという意志が存在していなければならない。

次章では読書への意欲という見方で、子どもの読書行動に迫っていきいたいと思う。

表8・一番おもしろかった本

()内は回答者の数

6年男子	1. 怪人20面相・少年探偵団 (7)	6年女子	1. にげ出した魔女のほうき (4)
	2. ズッコケシリーズ* (5)		2. ズッコケシリーズ (3)
	3. 怪盗ルパン・マガーク探偵団 (4)		3. 小公女 (3)
	4. ドリトル先生シリーズ (3)		4. ぼくら三人にせ金づくり (3)
	5. 15少年漂流記 (3)		5. 不思議の国のアリス (2)
	6. エルマーの冒険 (2)		6. 吾輩は猫である (2)
	7. トム・ソーヤの冒険 (2)		7. 少年探偵ブラウン (2)
	8. 二死満塁 (2)		8. さと子の日記 (2)
			9. 生徒諸君 (2)
			10. おちゃめなふたごの秘密 (2)
			11. 霧のむこうのふしぎな町 (2)
			12. おしりが4つでしっぽが5本 (2)
			13. 不思議なかぎばあさん (2)
5年男子	1. ズッコケシリーズ (6)	5年女子	1. ズッコケシリーズ (6)
	2. 孫悟空 (3)		2. ぼくら三人にせ金づくり (4)
	3. ぼくら三人にせ金づくり (3)		3. 小公女 (4)
	4. ごんぎつね (2)		4. ミス3年2組の誕生会 (3)
	5. ペーブルース (2)		5. 小さなスプーンおばさん (2)
	6. 山の王者クラッグ (2)		6. 生徒諸君 (2)
	7. トム・ソーヤの冒険 (2)		7. かぎばあさんの魔法のかぎ (2)
	8. 2年間の休暇** (2)		8. 若草物語 (2)
			9. 15少年漂流記 (2)
4年男子	1. 日本昔話 (4)	4年女子	1. 生きるんだボンちゃん (2)
	2. ズッコケシリーズ (4)		2. 日本昔話 (2)
	3. 孫悟空 (2)		3. デブの国ノッポの国 (2)
			4. それ行けズッコケ三人組 (2)
			5. 小公女 (2)

*ズッコケシリーズ それ行けズッコケ三人組・ズッコケ山賊修業中・とび出せズッコケ事件記者・こちらズッコケ探偵事務所などを含む

**2年間の休暇 15少年漂流記の原題

表8・付 表

性別	男		子			
学年						
6 年	ぼくはおっこ新聞記者 15少年漂流記 夏服のイヴ Wの悲劇 怪人20面相 幻魔大戦 怪奇40面相 ぼくの太平洋大航海 日本まんが歴史 40枚の卒業論文 スヌービーとチャーリーブラウン 黄金仮面 ドリトル先生 ふなやしきの謎 のんびりこぶたとせかせかうさぎ ツタンカーメン王の秘密 ズッコケシリーズ トコトンボーイ 大五郎は天使のはねをつけた ぼくがぬすんだんじゃない デブの国ノッポの国 カロリーヌの月旅行 ルパン全集・マガーク探偵団 きみはダックス先生がきらいか 月の輪グマ 子ぐまのポンの大冒険 さるとかに ビルマのたてごと ジャングルブック ぼくら三人にせ金づくり 今昔物語 源氏物語 軍の色は空の色 宿題ひきうけ株式会社 ドリトル先生の郵便局 トム・ソーヤ 二死満塁 星からきた大どろぼう エルマーの冒険 野口英世 スプーンおばさんのゆかいな旅					三 ク レ ブ 天 き 少 お 買 お 魔 大 30 や お く
5 年	鉄道ファン ナポレオン 南極大陸横断 かけぬけた夏 南極物語 ズッコケ山賊修業中 約束を守ったインディアン 三木物語 孫悟空 2年間の休暇 坊ちゃん 三十八人のおん柱祭り 犬のホームズ るすばん先生 怪人20面相 プー等あげます それいけズッコケ三人組 ポンポン トム・ソーヤ アラビアンナイト とらやんの大冒険 怪奇40面相 東海道中膝くり毛 ぼくら三人にせ金づくり ベーブルース 銀河鉄道の夜 黒ねこたんてい団 わたしはロボット 2丁目のおばけやしき 山の王者クラッグ ズッコケたんてい事務所 マガーク少年たんてい団 月の輪ぐま ゆう霊殺人事件 こんごつね 宿題ひきうけ株式会社 さる地蔵 名犬ラッシー 片耳の大鹿 さよならよごえむさん きがん城 体のひみつ らせん階段の謎 ズッコケシリーズ キャプテンはつらいぜ ドリトル先生					江 ユ 10 家 古 あ 小 若 ミ イ は 火
4 年	ぞうのいない動物園 金のにわとり 森からの手紙 日本の歴史 ズッコケ名たんてい 小3クイズ 織田信長 ブラックエンジェルズ とらのきば トイレ入門 恐竜くんと散歩 とび出せズッコケ事件記者 ぼくら三人にせ金づくり サッカー入門 3年2組のゴリラ先生 日本昔話 雑学面白百科 ふしぎなたからもの シンドバッド なぜかなぜだろう おとうさんのおへそ おかしなおかしな月火水木金土 オーロラの下で 孫悟空 火曜日のごちそうはひきがえる 野球 空海 白い戦士ヤマト 宇宙 怪盗ルパン 3年3組三銃士 ドラゴンボール ワンワン物語 エジソン 龍の涙 ヘンシン・スグナクマン プロ野球を10倍楽しく見る方法 人物日本の歴史 カロリーヌの月旅行 こちらズッコケたんてい事務所 ベートーベン 怪人20面相 長鼻くんというなぎの話					も ま マ そ 日 カ リ わ は ハ ひ お

女 子

三匹のくま グリックの冒険 つっぱりナオトとヒゲハチ先生 地下室からの不思議な旅
 クレヨン大国の花うさぎ お星さまのレール 夏子先生とゴイサギボーイズ 不思議の国のアリス
 プウ一等あげます ふしぎなまがりかど 本当の空色 南極のタロジロ 若草物語 時をかける少女
 天国に一番近い島 みず虫かゆい事件 ドリトル ズッコケシリーズ 生徒諸君 ぼくら三人にせ金づくり
 きりのむこうのふしぎな町 それいけズッコケ 12才の合い言葉 ぼく日本人なの
 少年たんていブラウン 白いエプロン白いやぎ 銀河鉄道の夜 リコはお母さん 西遊記
 おしりが4つでしっぽが5本 おばさんの犬ジョータン にげ出した魔法のほうき
 翼よあれがバリの灯だ おおかみに育てられて 北帰行殺人事件 ねずみのチョコッキ なんでもボーイ
 お母さんのつうしんぼ ヒットラーにぬすまれたももろうさぎ チカ子は四年生 わんぱくファイブ
 魔法のいる教室 エルマーの冒険 もぐら草っぱのなかまたち さと子の日記 ほらふき男しゃく
 大草原の小さな家 長ぐつをはいたネコ ろぼうの石 のぼらの村の物語 天使の花かご
 30かんおけ島 ブーツをはいた女の子 小公女 鏡の国のアリス 昔話
 やじきた物語(東海中ひざくり毛) かいじゅうになった女の子 カギばあさんのまほうのカギ
 おちゃめなふたこの秘密 舌巻は猫である ふしぎなかぎばあさん ちびっ子カムのほうけん
 くまうちの日までに ラモーナは豆台風 スプーンおばさん 野生のプリンセス

江戸川乱歩 魔法をかけられた舌 生徒諸君 ごんぎつね タイチ君のけっしん チョコレート戦争
 ユンボグの日記 メアリーポピンズ ズッコケ心算学入門 青い目の少女(怪盗ルパン) 子ども落語
 101匹わんちゃん ミス3年2組のたん生会 ぼくのきつねをつかまえないで おしりが4つでしっぽが5本
 家庭教師はズッコケ魔法 クオレ物語 地球と宇宙 マザーグース もりのおいしゃさん 赤毛のアン
 古事記 ふとつちよのきみとやせたぼく ドリトル先生 ねこまた号宇宙の旅 ズッコケたんていシリーズ
 あやうしズッコケたんてい隊 イヌ・ネコの本 吉四六さん レモンエイジの二人 銀の馬車
 小さなスプーンおばさん ぼくら三人にせ金づくり ねこはおふろがだいきらい 小公女 ワンワン物語
 若草物語 15少年漂流記 あのネコは犯人か ニルスのふしぎな旅 恐怖スリラー大百科 かさこ地蔵
 ミルクタイムにさきやいて 日本の歴史 海ぞくでぶっちょん こぶたのかくれんぼ さすらいの少女
 イソップ物語 お父さんと先生はたぬき まわれ地球儀 小さな郵便屋さん かぎばあさんのまほうのかぎ
 はじめてのなみだ のぼるはがんばる チカちゃんは四年生 ちいさいモモちゃん
 火曜日のごちそうはひきかえる

もしもしもも子さん 生きるんだポンちゃん 子ぎつねのジャムづくり 30かんおけ島 くまの子ウーフ
 まり子の音楽会 秘密の花園 15少年漂流記 おはなしプレゼント つくえの中のひみつ
 マコチンとマコタン 赤毛のアン 若草物語 かおるのひみつ アンナ ママへのアンケート4年生
 それいけズッコケ三人組 エリクとプタ ドリトル先生 小公女 とんでもねずみの大冒険
 日本昔話 サクランボクラブにクロがきた おへそに太陽を デブの国ノッポの国
 カレーライスが食べたいよう ああ無情 エコエコアザラク はじめてのおこづかい 三人で見た空
 りえの雲の旅 子鹿物語 はだしのゲン 不思議の国のアリス たぬき先生大冒険 コボちゃん
 わたしの小物 宿題ロボットてんさいくん 1年1組の白雪姫 ヘンゼルとグレーテル
 ははをたずねて じゃぱりおばけのおはるさん どんなケーキがいいかしら ビグルウィグルおばさん
 バディントンのクリスマス ヘレン・ケラー ヤンボウニンボウトンボウ ナイチンゲール キリスト
 びゅんびゅんごまがまわったら 明治天皇 ガリバー旅行記 ファーブル昆虫記
 おかしな魔法っ子1年生

表9・本を読んだ理由

(%)

項目	尺 度				
	とても そ う	かなり そ う	すこしは そ う	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 本屋さんで見てみて、おもしろそうだったから	34.4	9.9	10.3	6.1	39.3
	44.3				
2. テレビでやっていておもしろそうだったから	19.8	7.1	9.0	6.8	57.3
	26.9				
3. 図書館(室)で見て、おもしろそうだったから	13.7	6.2	6.7	7.6	65.8
	19.9				
4. 友だちがおもしろいと言っていたから	10.5	8.0	12.8	8.2	60.5
	18.5				
5. 家にたまたまその本があったから	12.5	4.8	6.2	4.5	72.0
	17.3				
6. お父さんやお母さんからすすめられたから	7.2	5.8	10.4	5.8	70.8
	13.0				
7. お兄さんやお姉さんが読んでいたから	8.3	4.5	4.9	4.4	77.9
	12.8				
8. 読書感想文を書くための課題図書だったから	7.0	4.7	6.7	8.5	73.1
	11.7				
9. 広告のパンフレットなどを見て、おもしろそうだったから	5.3	3.1	4.0	6.2	81.4
	8.4				
10. 先生からすすめられたから	1.7	0.6	4.0	7.3	86.4
	2.3				

4. 読書への意欲



子どもたちはどのような読書行動をし、どんな読書意欲を抱いているのだろうか。読書行動の成立条件の3番目の「読書への意欲」

を中心に、読書行動や読書への自信をみていきたい。

読書意欲

ひと口に本を読むといっても、どんな読み方をしているか（精読か、流し読みか）などによって、読書行動自体も多様化していると考えられる。そこで、今までの読書行動について、「たびたびあった」と「ときどきあった」を合わせた数値の高いものから順にならべたのが表10である。

この表によれば、「お気に入りの本を何度も読みかえす」71%と、他の項目に比べてとびぬけて数値が高く、つぎに、「お父さんやお母さんに、本を買ってちょうだいと言う」55%、「友だちどうして本の貸し借りをする」

39%などとなっている。

ただし、「わからない漢字を辞典で調べる」、「本を読んだ後で、感想などをノートに書いておく」といった意欲は、図5によれば低下してはいるが、表11のように、もっといろいろな本があればいいと思っているのである。

この表11をくわしくみると、「あなたのおこづかいでも買える安い本」や「きれいな絵や写真ののっている図鑑」があればいいですかという質問に対し、とてもそう思う割合は5割を超えており、読書への意欲自体は失われていないことがわかる。

表10・読書行動の種類

(%)

項目	尺 度		たまに あった	あまり なかった	ぜんぜん なかった
	たびたび あった	ときどき あった			
1. お気に入りの本を何度も読みかえず	54.2	16.6	15.1	6.1	8.0
	70.8				
2. お父さんやお母さんに「本を買ってちょうだい」と言う	29.0	26.1	22.3	13.7	8.9
	55.1				
3. 友だちどうしで本の貸し借りをする	19.4	19.7	16.9	17.0	27.0
	39.1				
4. お兄さんやお姉さんから、おさがりの本をもらう	21.3	11.3	16.3	9.9	41.2
	32.6				
5. 弟や妹におさがりの本をあげる	15.5	10.1	13.1	8.1	53.2
	25.6				
6. わからない漢字を辞典などでしらべる	14.2	11.3	17.8	22.4	34.3
	25.5				
7. 何さつもの本をべつべつに読みすすめる	8.7	7.4	13.2	20.3	50.4
	16.1				
8. 読書感想文のコンクールにおうぼする	5.9	8.2	9.0	13.2	63.7
	14.1				
9. 本屋さんにほしい本を注文する	8.5	5.4	13.3	10.9	61.9
	13.9				
10. いっぺんに何さつも本を買いくむ	5.6	5.4	10.2	21.4	57.4
	11.0				
11. 本を読んだあとで、感想などをノートに書いておく	3.1	7.1	13.7	27.0	49.1
	10.2				
12. 図書委員(係)に選ばれる	6.2	1.7	4.7	6.7	80.7
	7.9				

図5・読書行動の種類(学年別)

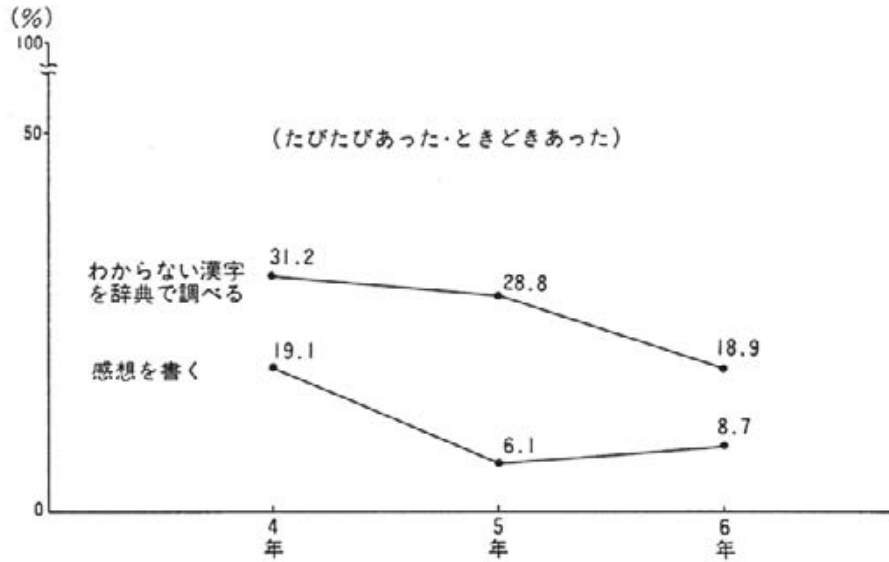


表11・本への欲求

(%)

項目	尺度				
	とても そう思う	かなり そう思う	すこし そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1.あなたのおこづかいでも買える安い本	56.2	12.3	12.0	9.2	10.3
2.きれいな絵や写真ののっている図鑑	53.8	19.2	14.7	7.9	4.4
3.しらべやすいようにくふうしてある辞典や辞書	52.0	19.2	14.8	8.1	5.9
4.まんがで説明してある参考書	46.2	17.5	14.1	12.3	9.9
5.わかりやすく説明してある参考書	42.9	19.6	20.6	7.7	9.2
6.むずかしい漢字にはふりがなをふってある本	36.6	19.2	21.6	14.3	8.3
7.科学についてやさしく書いてある本	27.8	14.1	29.3	15.9	12.9

○ = 最大値

読書能力への自信

読書の好きな子ども、意欲をもっている子どもたちは、自分自身の読書能力の自己評価も高く、ひいては国語の成績に対しても自信を抱いているのではないかと考えられる。そこで、読書に関するさまざまな能力について「必ずできる」と「たぶんできる」を合わせて数値の高いものから順にならべたのが表12である。

この表によれば、「1日で1冊の本を全部

読んでしまう」、「大きな辞典をひいて調べる」という項目には、5割以上の子どもたちが「必ず・たぶんできる」とこたえてはいるが、「読んだ本のあらすじを話す」などになると「必ず・たぶんできる」とこたえている割合は5割に満たなくなる。

しかも、学年の上昇とともに読書能力の自己評価が低下しており(図6)、勉強とはやや異なる読書の能力にさえ自信をもてなくなる

表12・読書能力への自己評価

(%)

項目	尺 度				
	かならず できる	たぶん できる	あまりでき そうもない	たぶん できない	ぜったい できない
1. 1日で1さつの本をぜんぶ 読んでしまう	35.2	33.5	16.6	9.3	5.4
	68.7				
2. 大きな辞典をひいてしらべ る	21.6	35.0	22.8	12.5	8.1
	56.6				
3. 読んだ本のあらすじを話す	14.6	33.2	24.9	14.5	12.8
	47.8				
4. クラスの中のだれも、まだ読 んでいないような本を読む	16.0	29.0	24.4	18.8	11.8
	45.0				
5. 中学生ぐらいが読む本を、 いま読んでしまう	10.5	17.8	18.7	23.2	29.8
	28.3				
6. 日記を毎日つける	7.5	20.4	24.7	27.0	20.4
	27.9				
7. クラスの中でいちばんたく さん本を読む	3.1	14.1	26.3	28.0	28.5
	17.2				
8. 原稿用紙で10まいくらいの 感想文を書く	2.7	10.2	17.4	30.2	39.5
	12.9				

子どもたちが増加していくことは、多くの問題を含んでいると考えられる。

読書能力の自己評価と読書が好きかどうかをクロスさせた表13が、学年の上昇とともに低下する自己評価をいかにして高めるかへの示唆を与えてくれる。

この表は、読書が「とても好き」とこたえたグループと「わりときらい」「とてもきれい」とこたえたグループをそれぞれとり出して、読書能力の自己評価がどうなっているかをみたものである。

この表によれば、読書が「とても好き」とこたえたグループが、圧倒的に、読書能力について高い自己評価を示しており、逆に読書

が「わりと・とてもきれい」とこたえたグループは、低い自己評価しかもっていないことが明らかになった。

しかも、つぎの表14によれば、高い読書能力の自己評価だけにとどまらず、作文や国語の力についても、高い自己評価をもたらすことが明らかになっているのである。

このように、読書好きの子どもたちは高い自己評価をもちうるわけである。それでは、子どもたちが読書を好きになる方法について、つぎに述べていこうと思う。

図6・読書能力の自己評価(学年別)

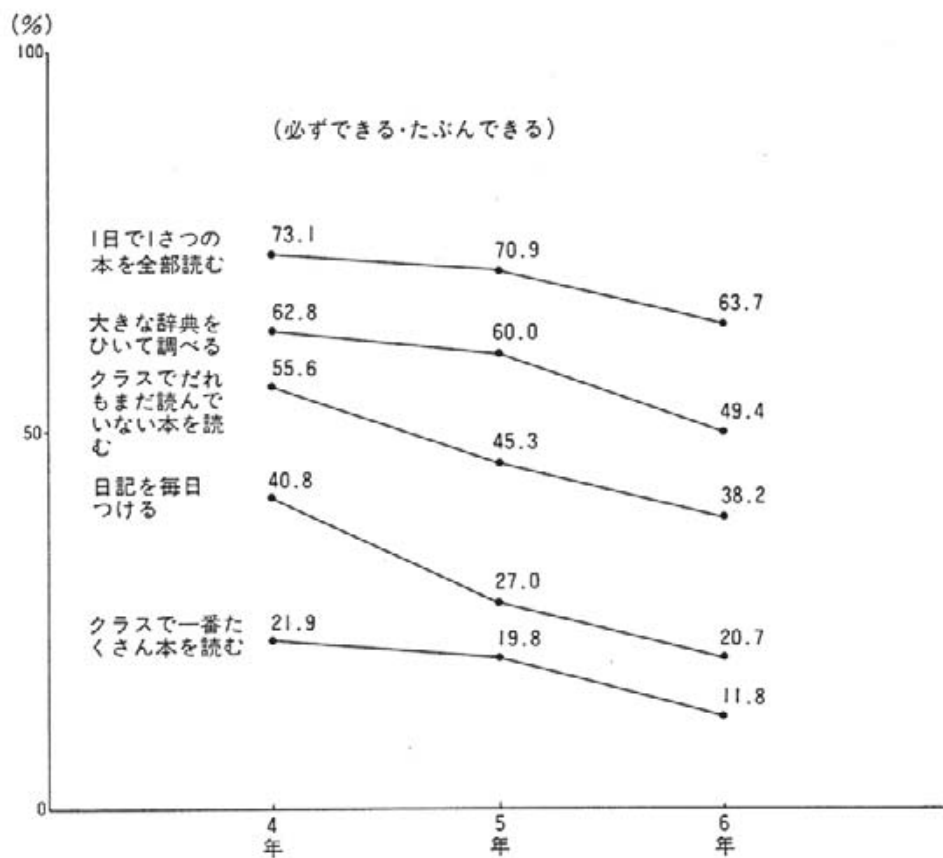


表13・読書能力の自己評価×読書が好きか

(%)

項目	尺度	読書が好きか					
			必ず できる	たぶん できる	あまりでき そうもない	たぶん できない	絶対 できない
1. 1日で1さつの本をぜんぶ読んでしまう	とても好き		63.9	> 25.1	> 5.3	1.4	4.3
	わりと・とてもきらい		14.5	< 23.7	> 11.8	< 31.6	> 18.4
2. クラスの中のだれも、まだ読んでいない本を読む	とても好き		29.5	34.2	> 20.8	> 6.8	8.7
	わりと・とてもきらい		6.8	< 12.2	17.6	< 36.4	27.0
3. 読んだ本のあらすじを話す	とても好き		29.6	31.0	> 19.4	> 8.3	11.7
	わりと・とてもきらい		4.0	< 18.7	21.3	24.0	< 32.0
4. 中学生ぐらいが読む本をいま読んでしまう	とても好き		24.2	28.0	> 15.0	13.5	19.3
	わりと・とてもきらい		0	< 8.0	6.7	< 20.0	< 65.3
5. クラスの中でいちばんたくさん本を読む	とても好き		9.4	< 31.0	33.0	> 12.3	14.3
	わりと・とてもきらい		1.3	6.6	5.3	< 25.0	< 61.8

表14・国語・作文が得意×読書が好きか

(%)

項目	尺度	読書が好きか					
			とても 得意	わりと 得意	ふつう くらい	少し 苦手	とても 苦手
1. 国語が得意	とても好き		19.0	26.7	36.7	> 9.5	8.1
	わりと・とてもきらい		1.3	7.9	< 23.7	< 38.2	28.9
2. 作文が得意	とても好き		11.0	21.9	30.9	20.0	16.2
	わりと・とてもきらい		1.3	1.3	< 14.5	< 34.2	< 48.7

5. 読書サークルの子どもたち



子どもが本を読むのが好きになるきっかけとして、読書サークルのような学校外での活動が考えられる。そこで、そのようなサークルを通じてそこに集まる子どもたちのサンプルを集めてみた。以下はサークルに入っている子どもたちとそうでない子どもたちとの違いを明らかにしていこうと思う。

図7は「お気に入りの本を何度も読み返す」といった読書行動の種類を、サークルに入っている子どもたちとそうでない子どもたちに分けてグラフ化したものである。なお、実線がそういうサークルに入っている子どもたちの数値であり、点線は入っていない子どもたちの数値である。

この図によれば、「わからない漢字を辞典などで調べる」以外は、いずれの項目についてもサークルに入っている子どもたちの数値が高く、こうした読書行動の体験を積むのに適していることがうかがえる。

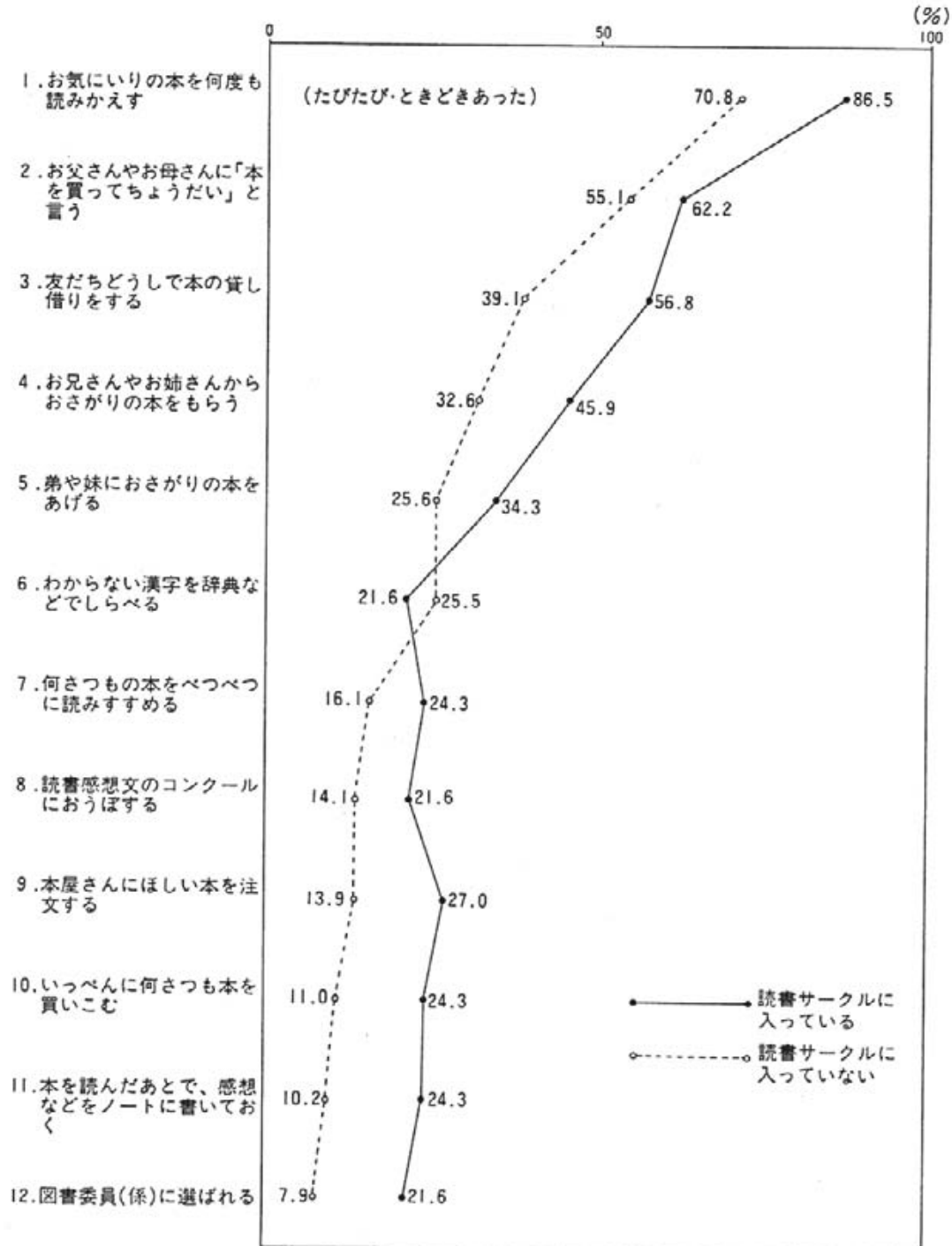
また、読書能力の自己評価についても、同じようなことが言える。

図8は、サークルに入会している子どもとそうでない子どもの数値をそれぞれグラフ化したものであるが、ここでもやはり、すべての項目にわたってサークルに入っている子どもの数値が高く、高い読書能力の自己評価を示している。

さらに、図9によれば、サークルに入っている子どもたちは、国語や作文が得意だとこたえる割合が高く、たとえばテレビの視聴時間も、サークルに入っていない子どもたちと比べて全体的に短くなっている。読書がとても好きとこたえた子どもがもつ読書能力についての高い自己評価と同じように、読書サークルに入っている子どもたちも読書能力についての高い自己評価を示し、国語や作文をも得意だとこたえているのである。

読書サークルというのは、読書好きの子どもたちを育てるためのひとつの機会にしかすぎないけれども、子どもたちに体験を与えて自己評価を高めることができる場だと言ってもよいと思う。

図7・読書行動の種類×サークルへの入会



本調査においては、読書能力の自己評価や、国語・作文以外の学業成績の自己評価や将来像について子どもたちにたずねていないので、実証はできないが、読書イコール勉強というように考えるならば、読書好きな子どもたちは高い学業成績の自己評価、明るい将来像を

抱いていることが予想される。読書サークルはひとつの方法として、少なくとも、子どもたちの活字メディアへの関心を高めたり、アクセシビリティを高める努力を行う必要があるのではないかと考えられるのである。

図8・読書能力の自己評価×サークルへの入会

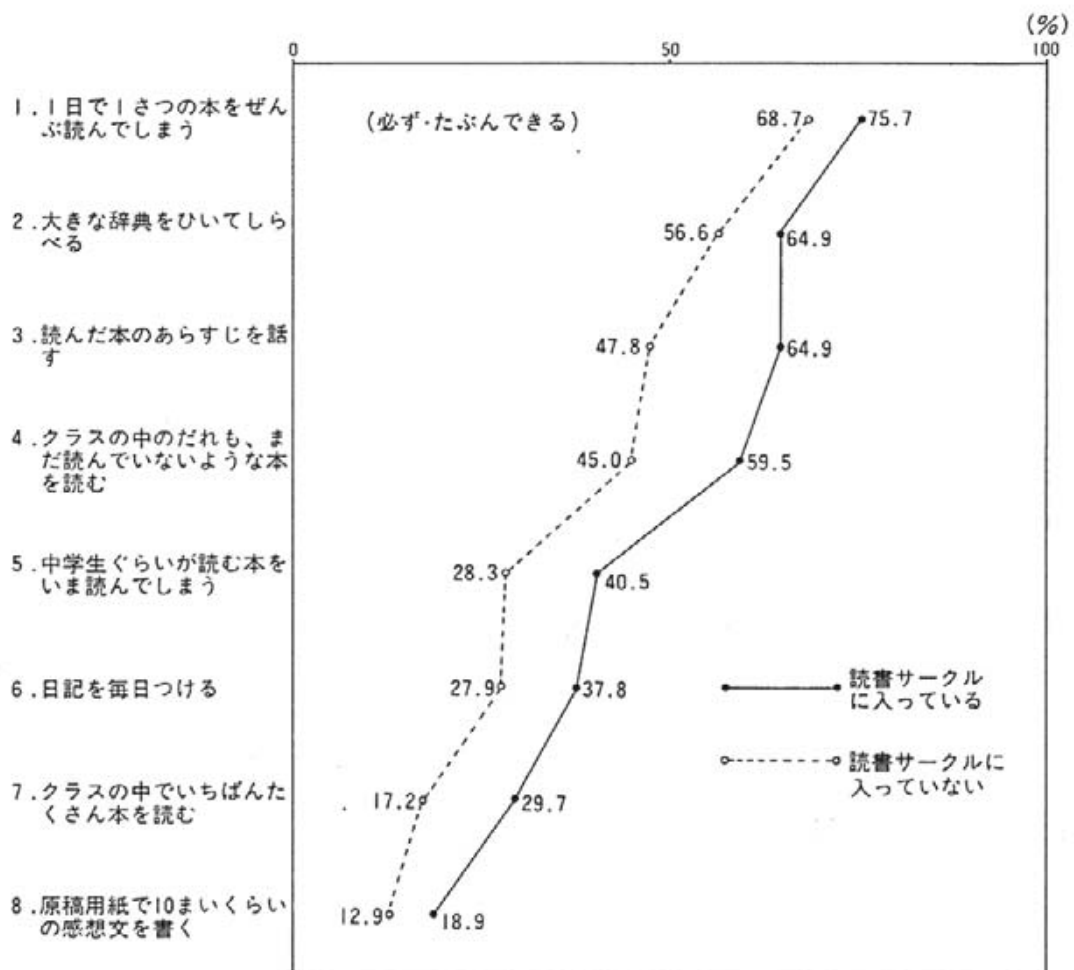


図9・読書生活×サークルへの入会

		(%)				
		とても得意	わりと得意	ふつうくらい	少し苦手	とても苦手
1.国語	上段(サークルに入っている)	29.7	32.5	27.0	10.8	0
	下段(入っていない)	9.8	20.2	35.2	24.4	10.4
		とても得意	わりと得意	ふつうくらい	少し苦手	とても苦手
2.作文	上段(サークルに入っている)	21.6	24.3	18.9	27.1	8.1
	下段(入っていない)	5.8	12.6	28.7	29.2	23.7
		毎日つけている	たまにつけている	めったにつけない	つけたことがない	
3.日記	上段(サークルに入っている)	13.5	35.1	37.9	13.5	
	下段(入っていない)	5.3	31.3	51.1	12.3	
		1時間未満	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間くらい 5時間くらい
4.テレビ視聴時間	上段(サークルに入っている)	10.8	32.4	35.2	16.2	5.4
	下段(入っていない)	10.4	17.9	28.3	23.3	11.7

上段(サークルに入っている)
下段(入っていない)

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。